

研究ノート

古墳時代中期を中心とした箱形石棺と竪穴式小石槨の研究史の整理

ー東日本の小規模古墳の埋葬施設を理解するためにー

いし ばし ひろし
石 橋 宏

1. はじめに
2. 箱形石棺と竪穴式小石槨の研究史
3. 成果と課題ー東日本の小規模古墳埋葬施設研究への援用ー

古墳時代中期を中心に箱形石棺と竪穴式小石槨の研究史を整理し、その成果と課題を明確にして、東日本の箱形石棺や竪穴式小石槨の研究にどのように組み込むか検討を行った。

1. はじめに

筆者は2013年度、2014年度の2年間栃木県小山市西高椅遺跡の調査に携わった（（公財）とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター編2018、2019、2020）。西高椅遺跡は栃木県南端部の南流する田川西側の台地上に位置する遺跡で、前期から終末期の古墳が約100基確認された大規模な群集墳である。群集墳中に墳丘を持たない可能性が高く、規模2m未満の竪穴式小石槨を確認し、調査に携わることができた。漠然と中期後半に竪穴式小石槨が多い群馬県方面との関係を考えていたが、問題を整理できていなかった。このような問題を検討するうえで、最低限東日本における前・中期古墳の埋葬施設の動向を整理する必要があると考えた。まずは、群集墳の埋葬施設に多い箱形石棺と竪穴式小石槨の研究史を整理し、その成果と課題がどのように東国の小規模古墳の埋葬施設の検討に影響を及ぼすのかを確認したい。

なお筆者は、板石や塊石で四周を覆い、同様の石材で蓋をしたものを「箱形石棺」、竪穴式石槨の規模を縮小し、棺を内包せず、直接遺体を置いて板石・割石・河原石等の石材で2段以上積んだものを「竪穴式小石槨」と定義するが、名称は「箱式石棺」「箱式棺」「小竪穴式石室」「竪穴式小石室」「竪穴式小石槨」など統一されていない。本稿では各研究者の報告名称はそのまま引用する。筆者の力量不足で全ての論考を集められたわけではなく、紹介できないものもあることをご承知いただきたい。

2. 箱形石棺と竪穴式小石槨の研究史

箱形石棺の研究は鳥居龍蔵に始まる。鳥居は徳島近傍の石棺を数多く観察し、石棺の組立方を中心に類型化して紹介した（第1図）。小口壁と長側壁との接合方法、長側壁の枚数、蓋の枚数とその置き方に注目し、他の地域に類例があれば比較検討の必要性を指摘した（鳥居1891）。その後、鳥居の鋭い観察視点は生かされず、喜田貞吉と高橋健自を中心とした1914年から1916年の棺槨論争の中で、笠井新也は阿波国の古墳を分布地域や形態、埋葬施設の様相を整理し、吉野川下流から海岸方面に分布する緑泥片岩の板状の石材を長方形に組み合わせたものを「阿波式石棺」と呼称し（笠井1915a）、喜田貞吉の棺槨の捉え方について疑義を呈するが（笠井1915b）、多くの研究者が指摘⁽¹⁾するように、石棺か棺を内包する石槨かという点に終始した（喜田1916）。

箱形石棺の各地の報告を踏まえて、後藤守一は、箱形石棺はヨーロッパで（Cist）と呼ばれる棺として最も簡易な構造で、金石併用時代に九州に甕棺と並行して利用され、古墳時代に及んだと説明する（後藤1927）が、古墳時代では九州・四国・中国地方に多いものの近畿地方には少なく、遠江・駿河や相模・上総・下総・常陸・磐城に類例が確認され、濃尾や上野・下野に少ないという分布的偏差を指摘し、満州～朝鮮半島の類例の報告から、朝鮮半島を経て九州から各地に伝わるが、齊一的に広まらず、地域的な偏差が認められることは民族に関わるのではないかと示唆した（後藤1934）。戦後を経て、板状石を産出する地域では社会的地位の低い墳墓に利用され、6、7世紀に多く造られる小古墳の主体部になることが多く、弥生時代に朝鮮半島を経由して北九州に伝わることに朝鮮半島の人々が葬法を携えて伝来したことを想定しているが、古墳時代にさらに東に分布を拡張することは、朝鮮半島の人々がさらに東に移動したことには疑念を持つが、畿内や武蔵など内陸に分布が少なく、必ずしも適した石材が認められる地域に分布するわけではなく、海岸沿いに分布し、帯状に広がることから、特殊な「人」に結びついた可能性を指摘する（後藤1958）。斎藤忠は古墳時代の海岸沿いに多い分布傾向を「倭名類聚抄」の安曇野氏などの海人との関りを想定する（斎藤1960）。特に後藤の整理により、古墳時代の箱形石棺の階層性と分布傾向が明確になった。

1960年代以降は箱形石棺の動向が各地でまとめられていく。川之江市史において松岡文一が伊予の箱形石棺の概要を示した。伊予の箱形石棺が海岸線付近の丘陵部に分布し、石材は結晶片岩を用い、幅と長さの相関図から縦横比（長幅比）3以上6前後、長さ1.5m～1.8mが伊予の「基準型箱形石棺」であり、さらに石材や縦横比、石の積み方から「長細型石棺」「切り石造り箱形石棺」「堅穴石室型」「小型箱形石棺」の5型式に設定をおこなった（松岡1960）。同年には、小野真一による箱形石棺の考察が行われた。研究史を踏まえ、全国的に箱形石棺を集成し、その伝播経路と時期（4次伝播）を検討した。静岡県の中期古墳に例が見られず、後期以降駿河湾周辺の後期古墳に類例が集中することや、西関東には中部地方から伝播したとする見解は重要であろう（小野1960）。三木文雄は徳島県の石井町石井廃寺の調査の折に石井町に所在する利包及び内容の2基の組合式石棺を検討するため、全国の事例を参考に長側石の枚数とその合せ方（継ぎ方）からA～Dの5類型を抽出し、3期に区分した上で、箱形石棺の全国的な拡散の様相を読み取ろうとする（三木1962）。茂木雅博は茨城県の霞ヶ浦沿岸の箱式石棺について、箱式石棺の構築位置⁽²⁾（封土中主軸中央→封土内主軸線中央部からは外れる→墳丘裾部か前方部）・被覆粘土の様相・赤色顔料の有無・副葬品の規制・追葬について・埴輪の様相などから5世紀中葉から7世紀までの箱式石棺の年代についてⅢ期区分する（茂木1966）。その後常陸大生古墳群の考察において、石棺の構築材の大きさと埋葬頭位、石棺を埋め込む溝から頭位側の妻石を基にした構築法と設置以前の設計を指摘した。妻石と側壁の長さが相関関係にあり、弥生時代のものは小型で単葬を基本とし、古墳時代のものは追葬を計画したもので、大型であることを指摘する。最後に過去の分布論を整理し、沿岸部に多い箱式石棺の分布は飛び石的で、民族（氏族）移動論（後藤1958、斎藤1960）と対応せず、横穴式石室以前に墳丘を持たないこの種の墓制に王権からの規制⁽³⁾を考慮した（茂木1971、1986）。

1960年代を中心に箱形石棺の分布地域を中心に型式学的検討が行われ始め、検討が進んできた。その成果を元に1970年代以降は各地で研究が深化するので、以下地域ごとに列島西側から成果を報告する。

九州地方

各地で箱形石棺として扱われるものの中に、堅穴式石槨との折衷系ともいえるべきものがあることは、早くから気づかれていたが、本格的な分析は九州から始まる。山中英彦は、北九州市東宮ノ尾古墳群の調査において、堅穴式石室状を呈する小石室（石棺系石室）について、古墳群内の検討から、箱式石棺状の腰石（長側壁・短側壁）が扁平な板石で、腰石上部の積石が一段のものから、腰石石材の厚みと大きさがまし、積み石も段数

が増え、石室化したものになると考え（第2図）、伝統的墓制である箱式石棺を母体に竪穴式石室の技法を取り入れた埋葬施設と位置付けた。5世紀初頭から7世紀末まで確認され、群集性が強く、副葬品が農工具や武器が多く、地域的共同体に密着した支配者層を背景とする被葬者と指摘した（山中1974）。

中間研志は福岡甘木市柿原古墳群の分析から、棺を内蔵する「石室」とは別に、棺を持たず直接埋葬する小規模な石室を「石棺系竪穴式石室」と仮定義し、柿原古墳群中には箱式石棺が分布しないことを考慮し、古墳群内で4世紀後半から5世紀前半に典型的な竪穴式石室（A類）が確認され、5世紀前半から中ごろに箱式石棺墓の影響で小口のみ立石を導入し、側壁は竪穴式石室同様な板石平積みのもの（A2類）、側壁も一部立石を持つもの（A3類）が派生し、5世紀前半から中頃に全壁に立石を持ち、その上に石積を持つ石棺系石室（B類）が出現すると指摘（第3図）した。山中の見解とは対称に竪穴式石室が箱式石棺墓に影響を受けて、立石が導入されたと考えた（中間1986）。中間は文中に指摘するように山中の研究を否定するものではなく、箱式石棺と竪穴式石室それぞれを母胎とした石棺系石室が存在すると考えている。山中と中間の研究は竪穴式石棺と箱形石棺の両者の特徴を持つ埋葬施設の研究の基礎となった。その後、吉留秀敏により北部九州の前期古墳埋葬施設について整理が成され、棺体を持たない小規模な竪穴式石室は「小竪穴式石室」、山中の報告した「石棺系石室」など内容が整理され、弥生時代以来の系譜をもつ埋葬施設と古墳時代に新来する埋葬施設があり、多様な埋葬形態は新たに再編された共通の序列に位置付けるため、北部九州の部族を統合する首長層により創出と実施されたことが推察された（吉留1990）。吉留の研究成果はさらに重藤輝行・西健一郎を中心に深化した。両者は北部九州東部の中期古墳の多様な埋葬施設の階層性を整理し、序列上位の首長層に採用された埋葬施設が、時期が下ることに別の埋葬施設を導入し、下位の首長にも波及していく様相を整理した。古墳時代中期に上位首長層が従来の共同体、民族的紐帯を離脱しようと新しい埋葬施設を志向するものの、下位首長層が従来の関係維持に努めた様相や階層的流動性が埋葬施設に反映すると指摘された（重藤・西1995、重藤2007）。重藤の研究成果は北部九州をモデルとして、その後西日本を中心に中期古墳の地域階層構造とその変化が埋葬施設にどのように対応するかという視点で各地において検証されている（中四国前方後円墳研究会2019など）。

高椋浩史は九州の石棺系石室を「石室壁の四方いずれかの基底石部に箱式石棺のように板石を立て、その上部に竪穴式石室のように石材を平積みする石室」と定義し、九州の類例を集成し、特に福岡県や佐賀県に類例が集中することを明らかにした（高椋2007）。重藤と西は、吉留の小竪穴式石室と石棺系石室の連続性を根拠に両者を一括して「石棺系石室」としている。高椋はいずれかの石室基底石に板石を立てることを基準としており、吉留の小竪穴式石室（本稿での竪穴式小石槨）を含めていない。この点は石棺系石室を検討する上で留意しておく必要がある。また高椋は石棺系石室について山中の見解（石棺を母胎）と中間の見解（石室を母胎）を認めつつも両者の線引きは難しいため、一括している。

箱形石棺の研究は、熊本県において新谷晶子が集成し、墳丘の有無や、分布地域、使用石材の傾向を整理し、弥生時代終末期に遡るものの古墳時代前期のものが大部分と指摘する（新谷1990）。同様に島津屋寛が熊本県下の類例を集成し、後述する清家章の分析視点（属性）を基に検討を行った。集団ごとの棺床構造や小口構造（長辺と短辺の組み合わせ方）を統一する傾向を見せるものの、周辺遺跡では統一されず、地域性の形成にはいたらないことを指摘し、中央権力からの影響の薄い極めて在地的な墓制と捉えた。清家の畿内の分析結果とは異なる様相が明らかになり、その背景に中央集権からの距離を想定する。また、特に天草諸島の北東に浮かぶ維和島の千崎古墳群とその周辺で採用される箱形石棺は、砂岩性で組み合わせに溝状加工や、長側辺の継ぎ方を「カギ状」にし、石材の加工⁽⁴⁾に「チョウナ削り技法」と「チョウナ敲き技法」を行うなど高

度な石材加工技術を有しており、前期後半から中期前半に認められるこの石棺を「千崎型箱形石棺」と提唱した（島津屋2013）。長崎県では、寺田正剛の研究により縄文晩期から古墳時代中期まで「箱式石棺墓」が確認され、縄文晩期から古墳時代初頭までの石材の組み合わせ方や長辺と短辺との比率、内包の深度などから変遷過程を整理している。古墳時代にかけて床石を敷いたり、頭位に石枕を置くなど丁寧になり、長側辺上部に板石材を積んで上部空間を拡大し、幅を広くして複数埋葬を可能にする形態が成立していくことが明らかにされている（寺田2005）。

山陰・山陽地方

山本清は律令制時代の「郷」ないし「里」を念頭に当時の「村落社会」の存在を想定し、この村落の構成員の相当多数のものの墳墓を「村落古墳」とした。村落古墳に多く採用される箱式棺について、石材と空間に着目した。すなわち石材を加工しない板状割石やそれに準じる割石や自然石をⅠ類、板状の切石をⅡ類。長さ2m内外、幅50cm内外かそれに準じるものをA類、幅、高さ1m内外のものをB類として、この分類は4種類に組み合わせ（ⅠA・ⅠB・ⅡA・ⅡB）、通有の箱式棺（ⅠA型）が古墳発生の時期からあり、後期には衰退するのにたいし、凝灰岩切石製の板石で組んだもの（ⅡA）は、後期的埋葬施設の直前に認められることなど、山陰の古墳文化のなかで、箱式棺の被葬者を位置付けた（山本1968、1971）。花谷浩は、島根県出雲市西谷墳墓群の16号墳の箱形石棺の検討において、山本の検討成果を考慮しつつ①切石の組み合わせ、②小口石が側壁を挟む（仮にⅡ型）、③掘形が大きいという3点に着目し、この3点で類似する事例が同県大田市仁摩町庵寺4号墳や同県松江市鹿島町奥才古墳群16号墳など前期の箱形石棺に共通する点があり、副葬品から前期末から中期前半の古墳と考えている（花谷2011）。山本清の研究以後類例が増え、中期の後半と考えられていた凝灰岩等の石材を加工した切石製箱形石棺が、九州の「千崎型箱形石棺」同様、前期から中期前半に島根県にも確認できることが明確になった。

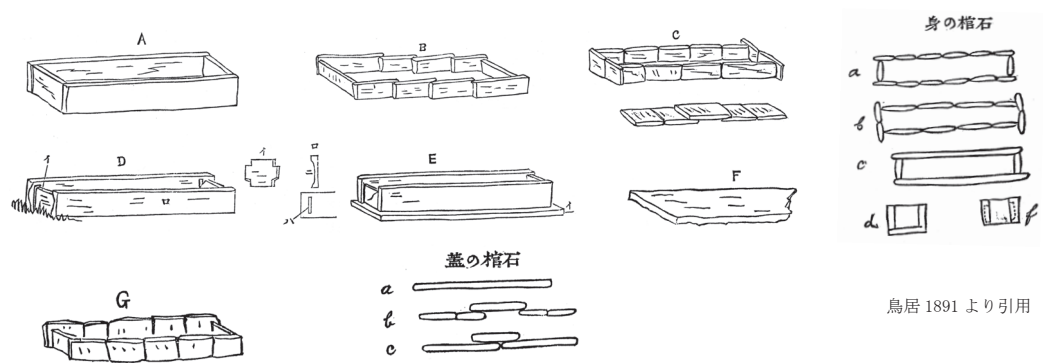
吉田学は鳥取県を中心とした山陰東部の小竪穴式石室を、山中英彦や中間研志、後述する福永伸哉の研究を参考に、箱式石棺を用いる石棺系小竪穴式石室（A類）と石積み小竪穴式石室（B類）に分け、相互の影響関係と系譜・年代を整理した（吉田2002）。

山口盆地の竪穴系埋葬施設を整理した森田孝一は、石棺系竪穴式石室は弥生時代以来の箱式石棺をベースとして石室構造を取り入れて成立するのではなく、5世紀に地域首長層が外から竪穴式石室を導入し、その後竪穴式石室構造に箱式石棺の構築方法が融合されたと考えている。本文に指摘ある通り、九州の中間研志と同様の理解である。但し例外として朝田墳墓群Ⅱ地区7号箱式石棺墓などのように箱式石棺を母胎にして一部竪穴式石室構造に似たものがあると指摘する（森田2016）。吉田や森田の検討によって、九州や後述する近畿地方以外の地域の石棺系石室の成立と展開についてその様相が判明する。

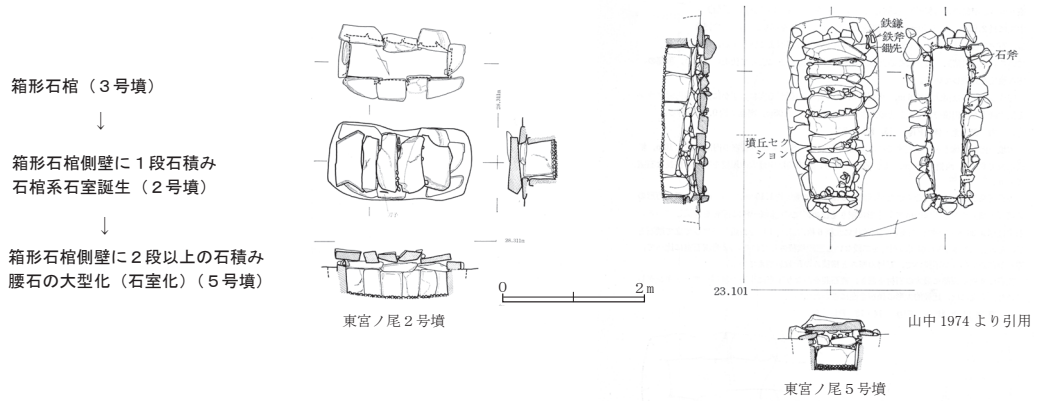
瀬戸内地方

愛媛県下の箱式石棺を集成した正岡睦夫は、出土古墳の概要をまとめ（正岡1983a）、弥生時代以来の伝統的な埋葬施設である箱式石棺は長大な竪穴式石室を有する古墳との社会的・身分的差異（階層差）があると指摘し、石材・副葬品・構築法・埋葬頭位について整理する（松岡1983b）。

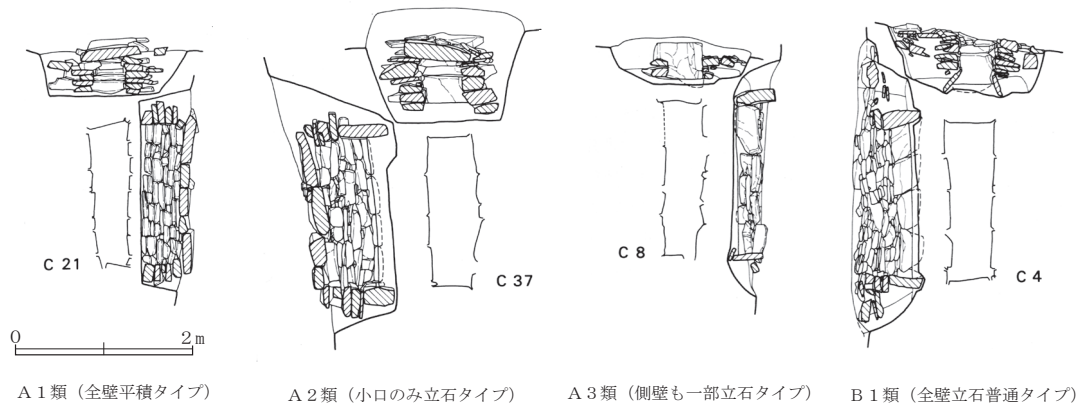
栗林誠治が徳島県吉野川流域の「阿波式石棺」と称された箱形石棺について〔使用石材〕・〔石材加工〕・〔長側壁構造〕・〔小口構造〕・〔蓋石構造〕・〔床面構造〕・〔平面形態〕・〔棺外施設〕・〔墓壇掘削時期〕の分類視点を組み合わせ、9つの系統〔蔵元系〕・〔稲持系〕・〔内容系〕・〔鶴島山系〕・〔谷口山系〕・〔桧北山系〕・〔恵解山系〕・〔節句山系〕・〔荻原系〕を抽出した。弥生時代前期の〔蔵元系〕とは系譜関係はなく、古墳時代前期に「Ⅰ型木棺」（福永1985の弥生時代箱形木棺分類）を結晶片岩という石材で製作した古墳時代的箱形石棺の〔内容系〕



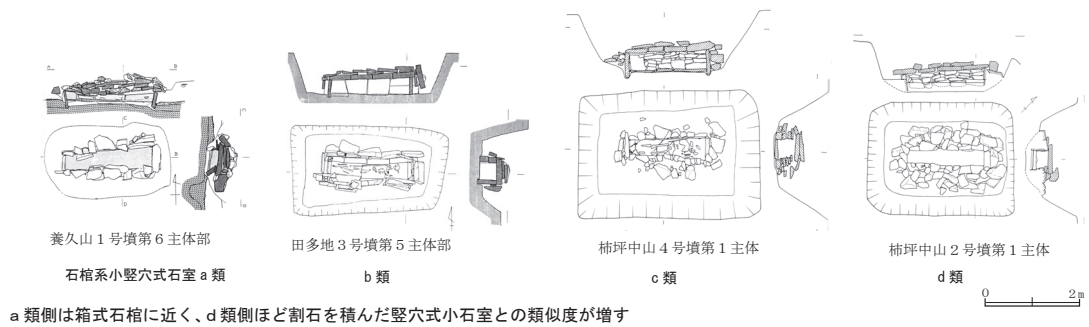
第1図 鳥居龍蔵の分析視点



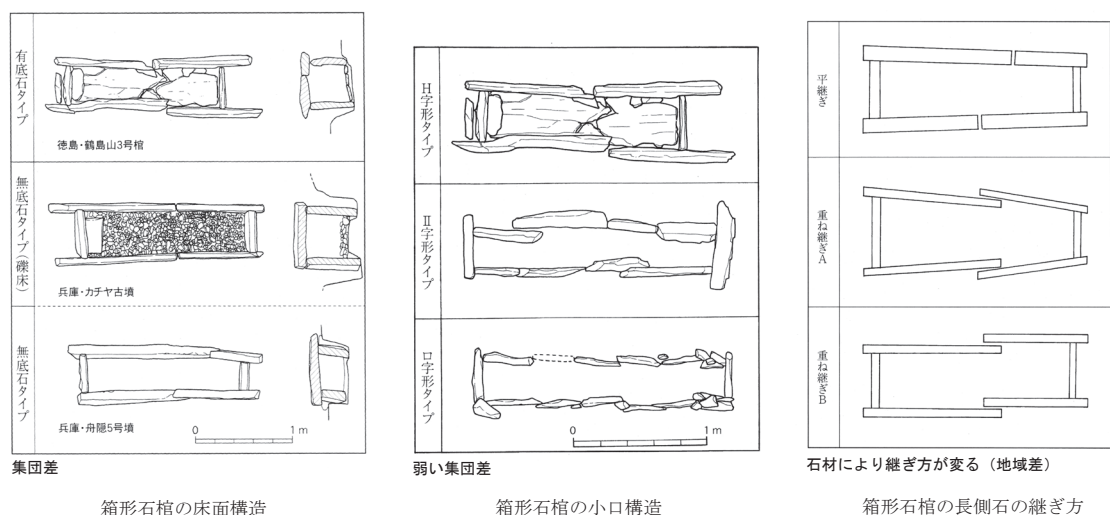
第2図 北部九州における箱式石棺からの石棺系石室の成立 (山中 1974)



第3図 北部九州における竪穴式石室からの石棺系石室の成立 (中間 1986)

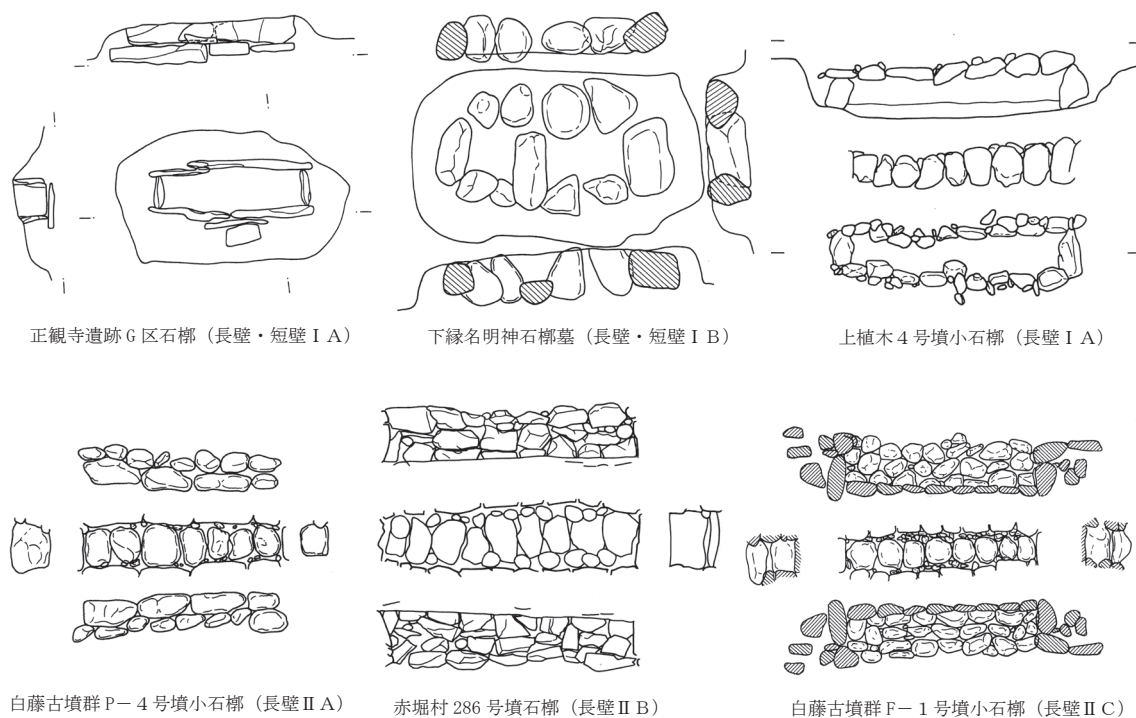


第4図 近畿地方の石棺系小竪穴式石室の分類 (福永 1992)



清家 2001 より引用

第5図 近畿地方の箱形石棺の分類視点



壁面の分類 (齋藤 2004)

I 類 底面から蓋石まで1石

A: 偏平・板状の礫を用いる

B: 偏平でない礫を用いる

II 類 底面から蓋石まで2石以上

A: 最下段が上段の石より大きい。乱石積

B: 根石が大きくなり、比較的均質。乱石積

C: 小口積を主体とするもの

I 類→II A 類→II B 類か

II C 類は初期横穴式石室の積み方とも類似するが、別系譜か

齋藤 2004 より引用

第6図 群馬県の竪穴式小石槨の形状

が出現し、中期に各種系統が成立し、横穴式石室の普及とともに箱形石棺の築造が停止されたことが指摘された。各種竪穴系埋葬施設とその相互の影響関係を整理し、その上で「阿波式石棺」は①阿波地域に限定され、②古墳時代前期後葉に成立し、後期前葉に築造停止し、③規範として結晶片岩が使用され、④阿波における地域的結集の証として、各水系に拡散した。⑤水系首長層から下位階層まで採用され、⑥他地域には拡散しないという上記特徴から阿波独自の埋葬様式と定義した（栗林2002）。

近畿地方

特に1970年代後半から1980年代以降は竪穴系埋葬施設を考える上で重要な研究成果が報告された。福永伸哉は弥生時代の木棺墓について棺の分解防止方法の違いが木棺型式の分類の基本的な観点となることを見抜き、3者の方法をそれぞれⅠ型・Ⅱ型・Ⅲ型木棺として、各遺跡の様相から一つの集団墓地の中で主流となる棺の型式が決定されており、この多数派に交じって少数存在する他型式の木棺は出自の違いであると結論づけ（福永1985）、木棺型式と交流の諸相を明らかにした（福永1991）。さらに福永は古墳時代の共同墓地を加美タイプ（前方後円（方）墳混在密集型）立野タイプ（円（方）墳密集型）汐井タイプ（有棺墓密集型）長曾根タイプ（無棺墓密集型）の4つの類型に整理し、その消長の歴史的背景を考察した。古墳時代前期から中期の中小古墳の埋葬施設は弥生時代以来の箱形木棺と箱式石棺という石の棺と木の棺であり、この両者が交錯する現象は、埋葬習俗と出自の違いに起因し、婚姻により両者が併存することを説き、弥生時代以降の階層分解の中で「出自」という原理の中に「政治」⁽⁵⁾という原理が追加され、地方首長の傘下に入り、その支配機構の一部を担う中小古墳の被葬者は出自を反映する伝統的な埋葬習俗と政治的な身分を反映する新たな習俗が絡み合いながら全体を構成することを指摘した（福永1989）。

さらに、福永は、京都府長岡京市長法寺南原古墳の前方部の小規模な竪穴式石室について、竪穴式石室の研究史⁽⁶⁾を踏まえ、内法長3m未満、壁体の全てまたは一部が2段以上積まれているものを「小竪穴式石室」と定義し、石積み小竪穴式石室（石室4壁を石積みで構築、割石と河原石あり）と石棺系小竪穴式石室（箱式石棺の上に石を積み壁体とする。箱式石棺との折衷の程度で4類（第4図））に分け、小石室の大部分は石室自体が棺として機能しており、人間の身体に合わせた造りであることを指摘し、石棺系小竪穴式石室は特に但馬地方に前期から認められ、埋葬頭位も考慮して、婚姻を介した但馬地方出身の被葬者を有力候補とする。葬送儀礼の場を利用して他地域との繋がりを広く顕示する役割を指摘する（福永1992）。福永の一連の研究は比較的階層の低い墳墓や群集墳の埋葬施設を理解する上で重要な指針となった。

福永の研究成果を受け、清家章は古墳時代の埋葬原理について検討するうえで、前方後円墳を代表とする首長層以外に下位に位置付けられる人々に着目し、近畿の箱形石棺に注目した。研究史を整理し、異なる属性が分類上で対等に扱われていることや、分類の意義が明確ではなかった点を問題視し、属性（分類視点）とその組み合わせの整理（第5図）を行った。その上で長側石の枚数、棺の幅、床面構造、小口構造などに着目し、検討の結果近畿地方では、長側石の枚数と棺幅は階層差を示し、床面構造・小口形状は集団差を示すことを明らかにした。階層差を示す分類では長石1枚型（幅広タイプ・基準（50cm）タイプ）長側石複数型（幅広タイプ・基準（50cm）タイプ）に、集団差では有底石型（小口H字形タイプ・小口Ⅱ字形タイプ・小口ロ字形タイプ）無底型（小口H字形タイプ・小口Ⅱ字形タイプ・小口ロ字形タイプ）に分類でき、各集団墓や各墳墓に使用される型式が一定しており、出土人骨の検討結果と福永の木棺研究の成果を踏まえ、集団に使用される棺が決められた型式のため、同一集団に属する可能性が高いことを明らかにした（清家2001）。清家の研究成果とその分析視点は以後の箱形石棺研究に大きな影響を与えた。さらに瀬戸谷皓の検討成果（瀬戸谷1998）を踏まえ、古墳時代の棺材の選択について、階層差や年齢差を表す要素を「垂直原理」、婚入や職掌、

政治的交流関係からによる棺材の選択要素を「水平原理」と整理すると、福永の研究成果で木棺と石棺は異なる棺として分離し、棺材の違いは出自との関係で説明してきたが、中規模古墳の複数埋葬の異なる棺材から出土した人骨の検討成果は兄弟や親子など家族関係の表示（垂直原理）で説明できるものであることが明らかにされた。一つの古墳に箱形木棺や箱形石棺などの埋葬が認められる場合、微細な階層構造で説明できるとする（清家2010b）。中小古墳の被葬者を検討するには、福永の研究成果と清家の研究成果を考慮して、慎重に言及する必要がある。

前後するが、奈良県桜井市から榛原町にかけて産出する室生火山岩（榛原石）を使用した箱形の石棺が知られ、石材を適当に打ち割っただけで加工せず、多数の石材を櫛的に使用したものをA型、一部未加工であるが幅、長さを決め、矩形に加工して箱形に整えたものをB型、溝や突起、柄穴など精巧に加工するC型に大別し、A型は5世紀後半から末に少数確認され、紀伊から間接的影響を受けた自発的発生と推察し、B型は6世紀後半から、C型は6世紀末から確認でき、特にC型は飛鳥寺造営に関わった石工集団が作成したものと推定する（楠本1985）。金澤舞は紀伊とその周辺の箱式石棺を集成した上で清家の分析視点を踏襲し、棺床構造の無底石タイプを礫床の有無で細分して、石棺は各集団ごとに在地的に構築された埋葬施設で、上位の首長層の意向に左右されない埋葬施設と推察している（金澤2021）。

東北・関東地方

九州で「石棺系石室」の注目が集まった1970年代以降は関東でもこの問題が顕在化する。群馬県で数多く古墳を多く調査した尾崎喜佐雄は、「竪穴式古墳」では墳丘を持たぬ例も多く、埋葬施設は地表面下に構築され、群馬県下の竪穴式石室は近畿地方の竪穴式石室とつくり方に違う点があり、板状石や礫を差し込んで構築する。内部長192cm程度が多く、近畿地方のものより小型であるため、「箱式石棺状内部構造」とであるととする（尾崎1971）。死屍（人体）を基準とした小規模な竪穴式石室は、棺をもたない箱式石棺と同様なものと理解している。ただし、壁体に礫使用のものと板石のものの2者が認められることを指摘しており、「箱式石棺状内部構造」とした古墳の埋葬施設は、特に板石を使用したものは箱形石棺と構造上同じであり、蓋石上面に礫や粘土を使用した丁寧な造りで「見た目上は竪穴式石槨」に見えるものである。尾崎の概念は四壁を河原石で積んだ竪穴式石槨と板石を用いた箱形石棺、その両者の折衷様式のものも含まれていることを注意しなければならない。

桜庭一寿は、箱式石棺状石室や小石槨などと指摘された西日本とは異なる人体を納める最小限のこの種の埋葬施設を「竪穴式小石室」と呼称し、群集する例（群集墳埋葬施設）、単独ないし複数で存在する例、横穴式石室墳と関連する例、付随する例（群集墳に）があり、5世紀後半以降初期群集墳に採用され、横穴式石室墳にも付随し、終末期古墳の時代まで造られることを明らかにした（桜庭1988）。桜庭はさらには竪穴式石室を規模からⅣ類に区分し、石材とその使用法から3類に分けて説目した。Ⅲ類（1.5m～2m未満）とⅣ類（1.5m未満）に人体を基準とした箱式石棺状石室と竪穴式小石室が大半を占め、大型古墳に採用される棺槨の簡略化で出現したと理解している（桜庭1990）桜庭の石材使用法は、A類：石材を地中に一列差し込んで壁体としたもの。B類：乱石積みで2ないし3段ほど積み上げたもの。C類：箱式石棺状のもので、凝灰岩などの切り石や板石を使用したものに分ける。これはA類（箱形石棺の一種）、B類（竪穴式小石槨）C類（各地で石棺系石室に区分される竪穴式小石槨と箱形石棺と折衷形のもの）と区分できるものであることが理解できる。

尾崎の調査成果や桜庭の検討成果に反映されるように、「箱式石棺状内部施設」や「竪穴式小石室」は群集墳で採用される埋葬施設に多いことは明らかであったが、上野地域（群馬県）の初期群集墳の動向について右島和夫が重要な成果を報告している。全て記載できないが、5世紀後半に広範囲に成立した初期群集墳は、

個々では相互に微妙な差異があるが、墳丘・埋葬施設（竪穴式小石槨）・埴輪等に共通した特徴が認められることを重視し、初期群集墳成立に伴い、下位の円墳や墳丘を持たない石槨墓まで、墳丘の有無、埴輪の有無、副葬品などによりきめ細やかな階層構造のランク付けが行われていることを明らかにした（右島1994）。

齋藤幸男は群馬県の竪穴式小石槨について、礫等の石材を用いて、箱状の施設を造り、直接遺体を納める竪穴系の埋葬施設と定義した。群馬県の200例近くを集成し、分類視点（属性）として、構築位置、石材、規模、壁体構成（第6図）に着目した。それぞれの属性が階層（構築位置・石材・規模）や時期的変化（長壁壁体構造の変化）、系譜（長壁壁体の石の積み方）、地域性（石材）を表すとし、このような小石槨の出現を伝統的な箱形木棺に求め、5世紀中葉以降の上位首長の石棺使用が下位階層の棺の材質の変化を促したと考察した（齋藤2004）。重要な成果が多いが、齋藤の竪穴式小石槨の定義は基本的に尾崎、桜庭の延長上にあり、かなり形状の異なるもの（第6図）も含むことを理解しておく必要がある。

群馬県内での竪穴式小石槨の調査類例は増加するが、各遺跡の考察では、赤堀村（現伊勢崎市）峯岸山古墳群の調査では、竪穴式石槨の掘形内の裏込めが、粘土と礫を交互に丁寧に詰めるものから、砂礫を粗雑に詰める様相に変化すると指摘する（松村1976）。渋川市丸山古墳の調査成果では、箱式石棺の蓋石上に粘土で覆った上に周囲を人頭大の川原石で覆っており、墓壇裏込めも石が多量に使用されていた。調査者の松本浩一はこのような埋葬施設を「箱式石棺状石室」と呼び、a：「石室を板状の石及び川原石を縦に差し込んで構築し、周囲を隅丸方形の石で覆うもの」と、b：「墳丘は土を用いず、石のみで構築し、石室は石を横積みしたもの2者」があり、aはbに先行すると想定した（松本1978）。松村や松本などの成果は後の桜庭や齋藤の検討成果に収斂されていく。

栃木県では、北部の那須湯津上村（現大田原市）の蛭田富士山古墳群の調査で、箱式石棺を埋葬施設とする古墳群の様相が判明した。常川秀夫は側壁と小口との挟み方からA～Dの4類に分ける（常川1972）。大和久震平は、箱式石棺の従来の研究成果が海岸沿いに分布するという視点から、河川が海岸まで流入する栃木県東部を中心に箱式石棺が分布すると考察した（大和久1972）。竹澤謙は栃木県内の箱形石棺7例について紹介し、特に常総地域との関係を想定するが、大田原市蛭田富士山古墳群では、周溝を基準に古墳との位置関係を示し、長側壁と妻石との関係から石材の組合方法を整理し、この二つの基準から年代差を導き出せると考えた（竹澤1974）。

その後栃木県内ではあまり活発な議論に進展しなかったが、上野恵司・安永真一は箱式石棺32基を集成し、荒川・那珂川水系と小貝川・五行川流域という栃木県東部に分布が集中することを再確認し、東部の事例は霞ヶ浦沿岸部との関係が、渡良瀬川流域など西部の事例は、上野地域との関係が想定できると推察し、墳丘の有無・箱式石棺の位置（封土内か地下か）・周溝の有無・妻石と側壁の関係・石材（板石か河原石か）・石材の用い方（側壁の石材を縦長か横長か）これらの分類項目を組み合わせ9種類に分類し、出土土器と石材規模の企画を考慮し、5世紀末から7世紀初頭まで5段階に整理する。墳丘の封土内から地表下に構築する傾向は窺えるものの、墳丘や周溝の有無は各地域の被葬者の位置づけに対応し、当初は有力古墳の内部主体として採用されるものの、横穴式石室導入後従属的になるという階層性の整理を行っている（上野・安永1989）。その後は水野順敏による箱式石棺の集成がある。（水野2009）。

竪穴式小石槨の研究は橋本澄朗の栃木県壬生町銭淵遺跡の検討成果（橋本1978）や、その成果を受けた秋元陽光の横穴式石室の系譜を引く「小石室」の検討成果（秋元1990）など後期・終末期古墳の成果があるが、中期古墳では少ない。内山敏行は宇都宮市の笹塚古墳と東谷古墳群に近接する磯岡北古墳群中の墳丘を持たない1号石室は、鉄鐸が出土することを含め、群馬県高崎市倉賀野万福寺遺跡の6号墳の石室構造と類似して

いることを指摘している（内山2006）。

常総地域では古墳時代後期以降に箱形石棺が盛行することが知られており、茨城県について中期古墳に関わる一部を紹介すると、茂木の検討以後、黒沢彰哉が常総地域の群集墳の分析中に片岩（筑波石等）使用箱式石棺について、箱形木棺に系譜を求め、6世紀初頭の箱式石棺は材質を石に置き換えた木棺同様な大型の石材を使用するものの、側壁が次第に小型の石材を縦位に数枚使用する方向に変化すると指摘する（黒沢1993）。石橋充も筑波山東側に産出する片岩を使用した埋葬施設に着目し、箱式石棺、その他の石棺（長持形石棺に類似するもの）、横穴式石室、石棺系石室A類（箱式石棺に短い羨道をつけたような構造）、石棺系石室B類（箱式石棺に前室を付けたような構造）に分け、それぞれの埋葬施設を細分し、年代と分布圏を整理した。上位層の埋葬施設は一貫して狭い分布圏の埋葬施設を使用し、中間・下位層が広い分布圏（複数の政治圏を含む）の埋葬施設を使用することを明確にし、片岩使用の埋葬施設は埋葬施設の形態を超えて階層間内で一定の秩序があることを明らかにした。箱式石棺は大型前方後円墳である舟塚山古墳の陪塚である舟塚山14号墳が箱式石棺であり、舟塚山古墳に長持形石棺が導入されている可能性が高く、千葉県香取市三ノ分目大塚山古墳の筑波片岩製長持形石棺の存在から、畿内風の長持形石棺を祖型として箱式石棺を捉えると「棺」としての意識から離れて、床石が消失していく方向に年代が整理できると考え、床石に着目して、Ⅰ型式（棺内法1／2を超える大型板石を1～3枚使用）、Ⅱ型式（棺内法1／2を超えない小型板石を3枚以上で構成）、Ⅲ型式（不定形な板石を組み合わせるか、割石を使用するもの）、Ⅳ型式（片岩の割石・河原石・木炭等を敷き詰めて構成）と整理し、基本的にⅠ型式からⅣ型式に年代的に変化すると指摘する（石橋1995）。

なお茂木雅博は改めて霞ヶ浦沿岸の箱式石棺について検討し、茨城県三昧塚古墳や千葉県三ノ分目大塚山古墳などの石棺は大和王権に採用された長持形石棺の系譜上に位置付けられ、5世紀中頃に円墳に採用され、6世紀中頃に爆発的に増える箱式石棺とは区別し、箱式石棺を埋葬する各古墳の規模や埋葬位置、副葬品の様相と歴史的背景も踏まえ、霞ヶ浦沿岸が大和王権の支配圏の北端であり、箱式石棺の被葬者を北方蝦夷対策のために王権側から派遣された屯田兵的な性格の被葬者と捉え、王権に規制されて薄葬を義務付けられていることを説く（茂木1999）。

東北地方

福島県浪江町本屋敷古墳群の調査成果の中で高橋敦彦は、福島県、宮城県、山形県の60の古墳群から出土した箱式石棺を集成し、石棺の構築方法（石材の加工度Ⅰ～Ⅲ）と石棺を据える土壌（掘りこみ位置：A地山・B墳丘盛土中）により細分し、箱式石棺の被葬者について、副葬墳などから比較的低い階層の被葬者であり、土器を伴う例から、5世紀後半から6世紀前半頃を中心とした年代が妥当とする。これは群集墳の形成時期と一致し、畿内政権の伸長に伴い、比較的低い階層の人々に古墳被葬者が拡大された結果と見る（高橋1985）。福島県では、いわき市が凝灰岩製箱式石棺の分布の中心地であり、猪狩忠雄は箱式石棺の小口（短側壁）と側壁（長側編）の組み合わせに注目し、当初は小口が側壁の内側にあり、側壁に挟まれていたが、次第に側壁の外側に出て、石材が二重構造になる傾向を指摘した（猪狩2001）。

山形県では村山市を中心に箱形石棺が知られ、茨城光裕は石材と側壁構造・床面敷石の有無に着目して年代的整理を行う。5世紀から7世紀まで箱式石棺が使用され、大型（A型）のものから次第に小型（B・C型）になることや、側壁構造や床面の簡素化（石材二重から一重、床石の消失）する傾向を指摘した（茨城2001）。

東北地方の古墳研究を総括した菊地芳朗は、中期中葉から後期初頭に出現する群集墳の埋葬施設は箱形石棺と木棺であり、箱形石棺は新しい系譜のもとで出現したか、木棺の形態を石に置き換えることで出現した

かいくつかの可能性はあるが、東日本では、刳拔式や組合式の石棺が出現しており、長井前ノ山古墳のような棺身が板石を組み合わせる石棺があり、こうした組合式石棺が祖型となった可能性も指摘する（菊地2010）。

近年では未盗掘古墳として注目された福島県喜多方市灰塚山古墳（前方後円墳59.57m）の調査成果が公表され、後円部第2主体部の粘土と礫（報告書では石組み）で覆われた箱式石棺の構築手順が丁寧に解説され、東北の箱式石棺が集成された。蓋石上面を石組みで覆う東北地方の事例との比較などの検討が行われている（高橋2023）。

全体

近年、全国の箱式石棺を集成した茂木雅博の成果（茂木2015）がある。古墳時代の基本的な内容は、過去の成果を整理したものであるが、箱式石棺の集成表や図面は、各地の様相を知るのに至便である。

目的が異なるためあまり字数を割かないが、海岸の砂丘で磯石を使用した竪穴式小石槨や箱形石棺が知られるようになり、生産遺跡の実態とともに「海人」について検討成果が蓄積した。特に「海の古墳を考える会」の検討成果から学ぶことが多い。

3. 成果と課題－東日本の小規模古墳埋葬施設研究への援用－

伝播論と系譜論：箱形石棺と竪穴式小石槨を考える上で最も問題なのは伝播論と系譜論と考える。1960年代までは伝播論が重要な課題であったが、近年は茂木の検討を除いて検討がほとんどない。これは系譜論とも表裏の関係があり、当初は弥生時代から古墳時代に継続して使用された箱形石棺が、九州から次第に伝播していくと考えられたが、徳島県（栗林2002）や群馬県（齋藤2004）、茨城県（黒沢1993）、東北地方（菊地2010）の検討から、箱形木棺からの材質転換や長持形石棺などの組合式大型石棺からの派生という視点も必要となった。

木棺重視の社会でなぜ材質転換が成されるのか、九州地方やその周辺の箱形石棺が伝統的墓制である地域から、そうではない地域への伝播、加えて、関東地方以北は竪穴式石槨が前期に導入されていない地域であり、埋葬施設も含め、石材を使用することについて、さまざまな検証が必要になる。箱形石棺はもちろん竪穴式石槨や竪穴式小石槨の導入とその周辺への波及を考慮する上で、近畿以東（東日本）では多くの視点から検証が必要である。

本稿で頁を割いて各地の研究成果を紹介したのは、東日本を検討する上で、非常に有効だからである。徳島県や茨城県を中心とした片岩埋葬施設の様相は上位首長層と下位の首長層との石材の共有関係を考える上で有用であり、結晶片岩という石材で横穴式石室（上位層）や箱形石棺（下位階層）が造られる紀伊もこのような視点で検証する必要があると考える。群馬県では5世紀後半の凝灰岩製舟形石棺の上位階層墳墓の共有以降（右島・徳田1998）、群集墳における竪穴式小石槨（箱形石棺を含む）の中に凝灰岩製のものが少なからず認められることは、齋藤の指摘通り（齋藤2004）、上位層の石材の使用が下位層にも材質変化を促したという意見に筆者も賛成である。

また改めて現代の視点で伝播論を考慮すると、京都府京丹後市太田南古墳群5号墳の大規模な1号主体部は凝灰岩を加工した箱形石棺である（岡林1998）。熊本県と島根県に続いて前期には丹後に高度な石材加工技術を伴う箱形石棺が確認され、当該期の割竹形石棺・舟形石棺製作地とその周辺⁽⁷⁾であることが理解できる。さらに長野県では森將軍塚古墳の周辺埋葬や周辺古墳では遅くとも5世紀前半に箱形石棺が使用されている（森將軍塚古墳発掘調査団編1992）。弥生時代以来の交易路を考慮すると、丹後など日本海沿岸を經由した導

入が考慮される。長野県の前・中期の一部地域の大型古墳に竪穴式石槨が導入されることも考慮され、群馬県における箱形石棺状の埋葬施設の誕生が、齋藤が考察したように在地箱形木棺に系譜を持つのか、長野県など隣県の埋葬施設の様相ともリンクするのか検討することは必要不可欠であると考え。小野真一の伝播論(小野1960)も忘れてはいけない。

なお、群馬県以東や以北、特に東北地方の箱形石棺についてはまだ、その系譜が明瞭ではない。関東⁽⁸⁾と東北における初現例の整理と形態の分析など、広い視点での比較研究も行う必要がある。

最後に栃木県と群馬県について見通しを述べたい。木棺墓優位の地域と考えられる栃木県では、箱形石棺や竪穴式小石槨は例が少なく、中期以降外部から導入された埋葬施設の可能性が高い。系譜の候補地の一つは群馬県と考える。理由の一つは、齋藤が指摘するように、群馬県の石積みの竪穴式小石槨は奥壁が幅広の一石を使用するなど、栃木県の竪穴式小石槨とも共通点がある。また、宇都宮市本村遺跡2号墳は直径約25.4mの円墳で、副葬品や埴輪から5世紀末に位置付けられるが(富川2004)、埋葬施設は、下部が箱形石棺で、掘形や蓋石上部に礫を置いて粘土で隙間を充填するなど、構築後は見た目上竪穴式石槨である。既に尾崎以後の検討成果があるように、群馬県で「箱式石棺状石室」と呼ばれた一群そのものである。福永や清家の検討成果にしたがって、政治的関係や出自、階層構造の問題など慎重に検討しなければならない。

群馬県は早くから検討成果が蓄積しているが、既に指摘したように箱形石棺を含む広い定義で「箱式石棺状石室」「竪穴式小石室」「竪穴式小石槨」が検討されてきた。その成果は学ぶことが非常に多いが、系譜について、もう少し形態を細分(箱形石棺や狭義の石積み竪穴式小石槨など)して検討することが必要と考える。特にいわゆる「石棺系石室」は本稿で紹介した九州や山陰、近畿地方で研究成果が蓄積しており、参考になると考えている。階層的下位であるが多数の初期群集墳被葬者や、外部から取り込まれた渡来人(積石塚古墳被葬者)の埋葬施設⁽⁹⁾であることを考慮すると、被葬者の階層性や系譜は重要な課題であり、さらに踏み込める可能性がある。別稿を準備しているので、改めて報告したい。

註

- (1) 特に棺槨論争の意義について上田直弥が的確に整理している(上田2022)。
- (2) 市毛勲1963の検討成果(変則的古墳)。
- (3) 小野山1970を参考に王権の規制について触れる。
- (4) 和田1983参照。
- (5) 和田晴吾により古墳時代の「畿内首長連合」と「首長連合体制」の枠組みと階層性について理論的に整理されている(和田1995、1998)。「政治」を考える上で重要である。
- (6) 都出比呂志の検討成果(都出1978、1986)の影響が大きく、埋葬頭位についても各地で検討課題となった。
- (7) 九州や島根、京都北部、福井県など、石棺の交流に関わる論考は多いが、まとめたものとして石橋2013がある。また砂岩性の軟質大型箱形石棺として東京都世田谷区野毛大塚古墳第2主体部(世田谷区教育委員会編1999)が注目されるが、技術系譜は未解明である。
- (8) 東海地方の中期古墳の埋葬施設について、大谷宏治の検討成果がある(大谷2004)。静岡県豊岡村寺山14号墳第1主体部が箱形石棺の側壁に1段板石を積む「石棺系石室」に復元され、九州地方との関係を指摘する。現在では本稿で整理したように九州地方以外に各地で類例が増え、再検討が必要と考える。
- (9) 群馬県の積石塚とその埋葬施設である竪穴式小石槨の構造については土生田2006が詳細に明らかにしている。

参考文献

- 秋元陽光1990「所謂「小石室」についての覚え書き」『栃木県考古学会誌』第12集 栃木県考古学会
- 荒木勇二1997「第IV章 まとめ 1 石原東1号墳の竪穴式小石槨について」『石原東古墳群』群馬県渋川市教育委員会
- 飯島哲也2003「合掌形天井の埋葬施設について－いわゆる合掌形石室についての再整理－」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』第11集
- 猪狩忠雄2001「第6章 考察 2 横山古墳群と箱式石棺」『横山B遺跡』財団法人いわき市教育文化事業団編
- 石橋 宏2013『古墳時代石棺秩序の復元的研究』六一書房
- 石橋 充1995「常総地域における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』第6号 筑波大学歴史・人類学系
- 市毛 勲1963「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」『古代』第41号 早稲田大学考古学会
- 茨木光裕2001「村山地方における箱式石棺の再検討」『庄内考古学』庄内考古学研究
- 小野山 節1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第3号 考古学研究会
- 上田直弥2022「第1章第3節 「棺槨論争の今日的意義」『古墳時代の葬制秩序と政治権力』大阪大学出版会
- 上野恵司・安永真一1989「下野・箱式石棺考」『栃木県考古学会誌』第11集 栃木県考古学会
- 内山敏行2006「第7章まとめ 第4節古墳時代中期の群集墳」『栃木県埋蔵文化財調査報告第299集 東谷・中島地区遺跡群7 磯岡北古墳群』
- 小片 保1960「人骨研究篇」『川之江市史』第1輯 古墳時代編 川之江市教育委員会
- 大谷宏治2004「第2章第5節結語 1. 寺山14号墳の主体部について」『寺山古墳群』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 岡林峰夫編1998『太田南古墳群』峰山町教育委員会
- 尾崎喜佐雄1971「第II章豪族の支配と古墳の築造 第III説古墳の編年 5 竪穴式古墳の編年」『前橋市史』第1巻 前橋市史編さん委員会
- 小田雅文1976「第3章結語 II 柿原古墳群の問題点 2. 野田東部7号墳について」『柿原野田遺跡』柿原野田遺跡調査団
- 笠井新也1913「阿波国古墳概説」『考古学雑誌』第4巻4号 考古学会
- 笠井新也1915「阿波式石棺を論じて喜田博士の示教を請ふ」『考古学雑誌』第5巻7号 考古学会
- 笠井新也1915「再び阿波式石棺を論じて喜田博士の示教を請ふ」『考古学雑誌』第5巻10号 考古学会
- 金澤 舞2021「紀伊地域における箱式石棺について」『星空の考古学－渡邊邦雄さん・尼子奈美恵さん還暦記念論集』ナベの会
- 亀井照人2000「第四節 古墳時代 三 福部の古墳 他地域とのかかわり」『新編 福部村誌』福部村
- 菊地芳朗2010「第2章 古墳の変遷と画期」『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会
- 喜田貞吉1915「所謂阿波式石棺に就いて笠井君に答ふ」『考古学雑誌』第5巻9号 考古学会
- 栗林誠治2002「阿波式石棺再考」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会
- 黒沢彰哉1993「常総地域における群集墳の一考察－茨城県新治郡千代田町大塚古墳群の分析から－」『婆良岐考古』第15号 婆良岐考古同人会
- 楠元哲夫1985「大和榛原石石棺の系譜」『同志社大学考古学シリーズII 考古学と移住・移動』森 浩一編
- (公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター編2018、2019、2020『西高椅遺跡』1・2・3 小山市
- 後藤守一1927「第2章 原始時代の遺跡」『日本考古学』四海書房
- 後藤守一1934「第4章原始古墳の様式 二箱形石棺」『世界歴史大系 東洋史 考古学』平凡社
- 後藤守一1958「古墳の編年研究 その三 (棺の類)」『古墳とその時代 (一)』古代史談話會 朝倉書店
- 斎藤 忠1966「第三章 統一国家の充実と古墳文化 三古墳文化より見た氏族と国造の問題」『古墳文化と古代国家』至文堂
- 齋藤幸男2004「上野の竪穴式小石槨」『研究紀要』22－創立25周年記念論文集－ 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 桜庭一寿1988「群馬県における竪穴式小石室の様相」『群馬の考古学 創立十周年記念論集』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 桜庭一寿1990「第5章 古墳時代の群馬 二. 竪穴式石室の分類」『群馬県史』通史編1 群馬県史編さん委員会

- 重藤輝行・西 健一郎1995「埋葬施設における古墳時代北部九州の地域性と階層性―東部の前期・中期古墳を例として」『日本考古学』第2号 日本考古学協会
- 重藤輝行2007「埋葬施設―その変化と階層性・地域性」『第10回九州前方後円墳研究会 宮崎大会 九州島における中期古墳の再検討 発表要旨』九州前方後円墳研究会
- 島津屋 寛2009「第IV部 1 熊本県下の古墳時代箱式石棺」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』熊本古墳時代共同研究グループ
- 新谷晶子1990「付論3 箱式石棺分布一覧表」『宮崎石棺墓群』宮崎石棺墓群調査団
- 清家 章2001「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」『古代学研究』第152号 古代学研究会
- 清家 章2010a『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会
- 清家 章2010b「古墳における棺と棺材の選択」『日本考古学協会2010年度兵庫大会研究発表資料集』
- 瀬戸谷 皓1998「木棺葬墓底施設について」『七面山古墳群・数田北遺跡』八鹿町教育委員会
- 世田谷区教育委員会編1999『野毛大塚古墳』野毛大塚古墳調査会・世田谷区教育委員会
- 瀬谷今日子2017「第7章 総括 第3節 岩橋千塚古墳群における箱式石棺」『岩橋千塚古墳群―大谷山4・5・6・39号墳発掘調査報告書―』和歌山県教育委員会
- 高橋敦彦1985「第4章 本屋敷古墳群の考察 第2節主体部（2）東北地方の箱式石棺」『本屋敷古墳群の研究』法政大学考古学研究室
- 高橋玲奈2023「第II編 灰塚山古墳論考編 灰塚山古墳出土箱式石棺の構造と特質」『灰塚山古墳の研究』辻秀人編 雄山閣 pp193-219
- 高橋浩史2007「第2部 桐ノ木尾ばね古墳実測調査報告 2. 石棺系石室を有する古墳」『考古学研究室報告』第42集 熊本大学文学部考古学研究室
- 竹澤 謙1974「栃木県内出土の箱式石棺について」『下野古代文化』創刊号 下野古代文化研究会
- 寺田正剛2005「長崎県地域における箱式石棺墓の様相について」『西海考古学』第6号 西海考古同人会
- 富川 努2004『本村遺跡（弥生・古墳編）』宇都宮市教育委員会
- 中国国前方後円墳研究会2019『中期古墳の現状と課題Ⅲ 発表要旨』第22回研究集会（広島大会）実行委員会
- 辻 秀人編2023『灰塚山古墳の研究』雄山閣
- 都出比呂志1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第3号 考古学研究会
- 都出比呂志1986『竪穴式石室の地域性の研究』大阪大学文学部国史研究室
- 鳥居龍蔵1891「徳島近傍の石棺」『東京人類学雑誌』第6巻63号 東京人類学会
- 中間研志1986「IV各論 B. 竪穴式石室・石棺系竪穴系石室」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』（6）甘木市柿原古墳群の調査Ⅱ 中巻 福岡県教育委員会
- 橋本澄朗1978「IV考察 3. 終末期の古墳について」『壬生銭淵遺跡』栃木県教育委員会
- 土生田純之2006「第二部 第四章 群馬県における積石塚の諸相」『古墳時代の政治と社会』吉川弘文館
- 花谷 浩2011「西谷15・16号墳について」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第1集
- 福永伸哉1985「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会
- 福永伸哉1989「共同墓地」『古代史復元5 古墳時代の王と民衆』都出比呂志編 講談社
- 福永伸哉1991「第2章 弥生時代の墓制 第3節木棺墓と人の交流」『原始・古代日本の墓制』山岸良二編 同成社
- 福永伸哉1992「第6章 考察 4 近畿地方の小竪穴式石室―長法寺南原古墳前方部小石室をめぐって」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第2冊 大阪大学南原古墳調査団編
- 福永伸哉1998「埋葬施設構築材の象徴性―木石併用棺の存在意義について―『古代中世の社会と国家』大阪大学文学部日本史研究室編 清文堂
- 正岡睦夫1983a「愛媛県の箱式石棺（上）」『遺跡』第24号 遺跡発行会
- 正岡睦夫1983b「愛媛県の箱式石棺（下）」『遺跡』第25号 遺跡発行会
- 松岡文一1960「箱式石棺編」『川之江市史』第1輯 古墳時代編 川之江市教育委員会
- 松村一昭1972「IV 編年的考察 5 石室構築手法による編年」『赤堀村峰岸村の古墳』2 赤堀村教育委員会

- 松本浩一1978「IV考察 1. 構築状からみた考察」『丸山古墳発掘調査報告書』群馬県渋川市教育委員会
- 三上次男1961『満州原始墳墓の研究』吉川弘文館
- 右島和夫1994「第二章 上野における群集墳の成立」『東国古墳時代の研究』学生社 pp63-92
- 右島和夫・徳田誠二1998「東国における石製模造品出土古墳」『高崎市史研究』第9号 高崎市史編さん委員会
- 水野順敏2009「まとめ 箱式石棺について」『原山古墳群発掘調査報告』矢板市教育委員会
- 宮小路賀宏1968「第2 古墳の構造と出土品 5. 5号墳」『炭焼古墳群』柳田康雄編 福岡県教育委員会
- 茂木雅博1966「箱式石棺の編年における一詩論－霞ヶ浦沿岸を中心として－」『上代文化』第36輯 國學院大學考古学会
- 茂木雅博1971「IV後説 二 箱式石棺について」『常陸大生古墳群』茨城県行方郡潮来町教育委員会 ppl18-159
- 茂木雅博1986「箱式石棺考－岡山県下を中心として－」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 茂木雅博1999「箱式石棺の再検討－霞ヶ浦沿岸を中心として－」『博古研究』第17号 博古研究会
- 茂木雅博2015『箱式石棺－付・全国箱式石棺集成表』同成社
- 森將軍塚古墳発掘調査団編1992『史跡森將軍塚古墳』長野県更埴市教育委員会
- 森田孝一2016「山口盆地における竪穴式石室・石棺系竪穴式石室の検討」『山口考古』第36号 山口考古学会
- 山中英彦1974「第3章総括 1.石棺系石室について」『東宮ノ尾古墳群』東宮ノ尾古墳群発掘調査団
- 山口英彦2013「第4章 第4節 百合ヶ丘古墳群の石棺系竪穴式石室について」『百合ヶ丘古墳群』苅田町教育委員会
- 山本 清1958「山陰地方村落古墳の様相」『島根大学論集（人文科学）』9号 後『出雲の古代文化』六興出版所収
- 山本 清1971「山陰の石棺についてIV」『山陰文化研究紀要』11号 後『出雲の古代文化』六興出版所収
- 吉田 学「山陰東部の小竪穴式石室についての一考察－石棺系小竪穴式石室の構造を中心として－」『島根考古学会誌』第19集 島根考古学会
- 吉留秀敏1990「北部九州の前期古墳と埋葬主体」『考古学研究』第36巻第4号 考古学研究会
- 和田晴吾1983「古墳時代の石工とその技術」『北陸の考古学』石川県考古学会
- 和田晴吾1995「古墳築造の諸段階と政治的階層性－五世紀代の首長制的体制にふれつつ－」『ヤマト王権と交流の諸相』名著出版 荒木敏夫編
- 和田晴吾1998「古墳時代は国家段階か」『権力と国家戦争』古代史の論点4 小学館 都出比呂志・田中琢編

研究紀要 第33号

発 行 公益財団法人 とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター
〒329-0418
栃木県下野市紫474番地
TEL 0285 (44) 8441 (代表)
FAX 0285 (43) 1972

発行日 令和7 (2025) 年3月28日発行
印 刷 第一印刷株式会社
